



シェルター(住居)建設のモニタリングの様子



Republic of
Uganda

アシストアフリカ!

アフリカは今、世界でも最大規模の国内避難民と難民を抱える地域です。「アフリカ最大の難民危機」と指摘されるほどの事態にもかかわらず、その実情が日本に伝えられる機会は少なく、知るすべも限られています。日本から約1万km離れた大陸で、何が起きているのか。タウトク編集部では、南スーダン、ケニア、ウガンダ、シエラレオネで活動するNGOピースウィンズ・ジャパンの協力により、その現実の姿を伝えていきます。支援活動を続ける同スタッフの奮闘のレポートを紹介しつつ、アフリカが抱える問題を少しずつもとき、少しでも身近な出来事だと感じられるようにしたい。

株式会社メディコムでは、読者の皆さんにタウトクを1冊(350円)購入いただくにあたり、その約1%である3円をアフリカの復興支援のために送金します。

「支援している」という高みに立った目線ではなく、積極的に関わり合いをもつことで現地の様子が気になるようになり、やがて世界で起こっているいろんな紛争や悲劇と、自分たちは決して無縁ではないことを肌で感じるための「3円」だと思っています。ぜひこの1%運動をご理解いただき、本誌連載にご注目ください。

PWJの携帯サイトはこちら!



世界各地で支援活動を続けるスタッフからの「現地活動レポート」、最新のNEWSなどの情報が携帯からチェックできるようになりました! 左のQRコードからアクセスしてみ! <http://peace-winds.org/>

タウトクでは毎月、アフリカの国内避難民・難民支援事業へ送金した金額=タウトクの販売部数×3円を読者のみなさんにお知らせします。

タウトク4月号の販売部数

4,966部×3円=14,898円

を支援金としてPWJを通じアフリカの国内避難民・難民支援事業に送りました。



peace winds
JAPAN

タウトク
medicomm inc

株式会社メディコム
月刊タウン情報クシマ編集部

ピースウィンズ・ジャパン現地レポート

難民として暮らしながら 現地スタッフとして支援活動に励む

ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)は、ウガンダ北部のビディビディと隣接するインヴェビ難民居住地区で南スーダン難民への支援をしています。ここでは日本人スタッフ3名を含む計18名のスタッフが日々の支援活動を行っています。その中には、難民の方もスタッフとして働いています。今回は、そのうち2名のプロジェクト・アシスタントを紹介いたします。

①インヴェビ難民居住地区を担当する キデン・エスターさん

私は、2018年3月からPWJのプロジェクト・アシスタントとして働いています。このインヴェビ難民居住地区内に住んでいる南スーダン難民で、ここには2017年2月に来ました。家族は4人で、子ども3人と一緒に暮らしています。子どもはまだ小さいので、日中私が働きに出ている間は近くの村からベビーシッターに来てもらいます。夫とは子どもができてすぐに別れたので、シングルマザーとして生活をやりくりしています。大変ですが、子どもの存在が今の私の原動力になっています。

PWJでは、プロジェクト・アシスタントとして、シェルターやトイレなどの建設事業をフィールドで支えています。現在(4月25日時点)は支援対象者を選定するため、毎日村ごとに一軒一軒の家を回りながらPSN(特別な支援が必要な人々)の情報を集めています。高齢者、身体に障がいがある人、親を亡くしている子どもなどで、周囲からのサポートが限られ、より脆弱な世帯へ



住民から聞き取りをするキデンさん(左端)

支援が届くように努めています。私は人と接するのが好きなので、この仕事にとってもやりがいを感じています。

南スーダンでの状況が好転したら、子どもたちと故郷に戻って暮らしたいです。地域の復興に貢献できるよう



村まわりをするキデンさん

②ビディビディ難民居住地区を担当する ゼマ・ジュリアスさん

昨年11月から、ピースウィンズ・ジャパンのスタッフとして働いています。私たち家族は、妻と二人の娘(4歳と2歳)や親族など総勢12人で、2016年9月に南スーダンからビディビディに来ました。家族の中で定職に就いているのは私だけです。最低限の食糧や生活用品は、UHNCRや支援団体からの支援を受けています。家の周りでもメイズ、落花生、ナスなどを栽培しています。

PWJに就職してから6カ月ほどになりますが、仕事に大きなやりがいを感じるとともに、様々な形で暮らしの変化を実感しています。まず、子どもたちに教育の機会を与えることができるようになりました。3人が中等学校、3人が小学校、1人が幼稚園に通っています。それから、将来、近くの町に自分の家を建てるための準備もしています。

最近、南スーダンの状況が以前と比べ少しずつよくなっていると聞いています。もちろん、近い将来、南スーダンに戻って暮らしたいと思っていますし、私も大学で勉強したいとも思っています。



PWJスタッフや同僚と話すジュリアスさん(左端)

このように、現地では、国際スタッフと現地の人たちが協力して日々の支援活動を行っています。これから、難民として住む人々はもちろん、スタッフも充実した日々をすごせるように支えていこうと思います。

ウガンダ事業現地駐在員 アレン・キム、柿崎 芳明